アーロンは政府に殺されたのだ
アーロン・スウォーツ（Aaron Swartz)の感動的な葬儀

'Aaron was killed by the government' – Robert Swartz on his son's death

16 January 2013

http://rt.com/usa/news/aaron-swartz-funeral-chicago-059/

翻訳：寺島隆吉・寺島美紀子、公開 20130120

IT 活動家アーロン・スウォーツ Aaron Swartz の父親が、息子の死の責任はアメリカ検察官にあると非難している。以下は、シカゴ郊外での感動的な火曜朝の葬儀のようすを、RT のアンドリュー・ブレイクが報じたものである。

アーロン・スウォーツ（２６歳）は金曜日 11 日、死亡しているのが発見され、自殺と報じられた。スウォーツは、インターネットを誰にでも使いやすくオープンなものにすることをめざすソフトウェアの開発に貢献し、また Reddit.com と Demand Progress の両方の共同開発者でもあった。これらはウェブ上でもっとも訪問者の多いサイトであり、どちらも高く評価されている活動団体でもある。

しかし火曜日（16 日）の葬儀では、スウォーツの IT 技術への情熱や彼のまったくの無私無欲さを、友人、家族、愛する人たちは思い出している。その一方で、参列者たちは近年この活動家を悩ましていた恐るべき法的苦難を認めざるをえなかった。

２０１１年、コンピュータ不正行為防止法（Computer Fraud and Abuse Act）という名目で、数件で、連邦検察官はスウォーツを告訴した。もし有罪となれば彼を３５年以上刑務所に送ることが可能になる犯罪である。政府によれば、スウォーツはマサチューセッツ工科大学の建物に侵入し、JSTOR から数百万件の学術研究論文をダウンロードし、おそらくそれを無料で配信する意図であった、という。

イリノイ州ハイランドパークにあるセントラルアベニュー・ユダヤ教会堂での、火曜日の葬儀で、「アーロンは自殺したのではない、政府に殺されたのだ」と、父親ロバート・スウォーツ Robert Swartz は語った。「世界をよりよき場所にした人間が政府によって死へと追いやられたのだ」

９０分以上もつづいた葬儀のあいだ、「グーグル検索」「アノニマス」「ハッカー」「コンピュータ不正行為防止法」といった言葉が何の違和感もなく語られ、そういった言葉が葬儀に出てくるのは当然であるかのようだった。スウォーツのパートナー、Taren Stinebrickner-Kauffman タレン・スタインブリックナー＝カウフマンが泣き笑いながら語った、最近のアーロンの懐かしい思い出のひとつは、ほんの数週間前の早朝の出来事だった。「絶対に解いてみたい高等代数学の方程式があるから１～２時間ほど僕につきあってくれ」と言ってきかなかった、というのだ。

他のひとたちも一様に語ったことだが、彼女の弔辞のなかでも取り上げられたのは、電脳技術の天才に最も近しいひとたちにとって、スウォーツは、社会変革を強く主張して止まない人物だった、ということだった。

「アーロンは私たち一般民にとって私たちが知っていると思っている誰よりも大きな存在でした」とスタインブリックナー＝カウフマンは語った。ニューイングランド出身の活動家たちの、強い結束で結ばれたサークルをとおして、彼女はスウォーツと知り合った、という。

「アーロンは本当に世界を変革したいと望んでいました」と彼女は語った。富や名声を得ることはアーロンにとって二の次だった。

彼に近しいひとが一様に語ったのは、このような彼の善意にもかかわらず 2011 年に起訴されて以来、忌まわしくもかれに襲いかかろうとしていた重罪判決の可能性のことだった。

この数週間は「彼はとても疲れ切っていました」、とスタインブリックナー＝カウフマンは思い起こす。「彼は私に言っていました、“僕はずっとこんな不快な気分で生き続けなければならないのだろうか”と」

しかしスウォーツが亡くなった今、彼が信じられないほど情熱をかたむけていた理念を推進する事業は、アーロンの同志であり仲間である私たちの肩にかかっている、と彼のパートナーは言う。

「私たちが今すぐ行動を起こし世界を変えること以外に、アーロンが望むことは何もないのです」と彼女は言った。そしてスウォーツはもうその中にいないにしても「正義のために結集しつづけてほしい」と彼もその一員であった社会に呼びかけた。もし社会が力を結集し、彼の主張を推進させることができるなら、アーロンのような「無実の若者を、検察官が追跡しつづけることを止めさせることができるのです」と彼女は語った。

弔辞の他の部分で、スタインブリックナー＝カウフマンは、スウォーツに告訴状を提出したマサチューセッツ地区担当の連邦検事[Carmen Ortiz]とマサチューセッツ工科大学[MIT]を手厳しく批判した。というのは、MIT にその気さえあれば、そのハッキング事件を連邦政府が追い続けるのを止めさせることができたはずだとも言われているからだ。

マサチューセッツ地区担当の連邦検事の事務所が音頭をとってすすめた「間違った人物描写」が、息子の死を招く大きな要因になった、とスウォーツの父親が語った。なぜなら、マイクロソフト社のビル・ゲイツ Bill Gates やアップル社のスティーブ・ジョブズ Steve Jobs は世間からコンピュータ界の理想像だとして偶像視され拍手喝采を受けているが、連邦政府の観点ではなく世界を全体的観点から見ると、息子のほうが彼らよりもはるかに清廉潔白だったとロバート・スウォーツ Robert Swartz は語った。

スウォーツ氏が思い起こしていたのは、かつて彼がアップルと一緒に仕事をしていたころ、ジョブズ氏と彼の共同経営者スティーブ・ウォズニアック氏 Steve Wozniak が、小さな「ブルーボックス」[長距離電話料金をごまかす装置]を売ることで、「電話会社に詐欺を働いていたことがあった」という事実だった。というのは、実をいうと電子装置は、国中の誰でもが長距離電話を無料で使うことが

できるものだったからだ。また、マイクロソフトの BASIC をゲイツ氏が開発したといっても、それは全くの「未完製品」だった、とスウォーツ氏は語った。

「こういう人物が、我々の文化のなかでは、もてはやされ英雄視されているのです」と彼は語った。

「それにたしてアーロンがやったことはどうでしょう。法的には全く問題ではなかったのに彼はそれによって破滅させられました」と彼は参列者に問いかけた。

スウォーツ氏はまた、MIT に対しても厳しい言葉を浴びせた。MIT は JSTOR と違って犯罪的ハッカーだとして無情にもアーロンへの訴追を取り下げなかったからだ。

「私たちは MIT にたいして思いやりを示してくれと何度も何度も頼みました」が、「思いやりより組織的懸念のほうを重要視したのです」と彼は語った。

アーロンが死んだあと、ハッカー集団のアノニマスは無許可アクセスをおこなって、MIT のサーバーに「アーロンへの献辞」を掲示した。それは火曜日の葬儀のあいだだけ見ることができたもので、電脳文化のなかで最も尊敬されている人物たちからの賛辞も含まれていた。

たとえば英国科学者で WWW（ワールドワイドウェブ）を開発したティム・バーナーズ＝リーTim Berners-Lee［現在、MIT 教授］は、葬儀のあいだアーロン・スウォーツのことを電脳情報社会の「長老 an elder」と呼んだ。バーナーズ＝リー氏が最初にスウォーツに出会ったとき、若き天才はわずか１４歳！だったという。

「彼ほど倫理的に潔癖な人物には出会ったことがありません」とバーナーズ＝リー氏は語った。「彼は電脳コードを書くことによって・・・世界変革が可能だということを知っていたのです」

「最後の最後まで彼は正しいことのために闘っていました」とバーナーズ＝リーは言う。

学者であり同時に政治活動家であるローレンス・レッシング氏［Lawrence Lessig、ハーバード大学教授］は、葬儀の席上で、アーロン・スウォーツと知り合って１０年以上にもなる［つまりアーロンが 10 代だったとき！］と述べ、政府がアーロンを

訴追しようとするのは全く的外れで「白痴」の見本だと非難した。

またJSTORの件でアーロンの弁護士を務めるエリオット・ピーターズElliot Petersは、アーロンの友人たちは今や、「自由と公正を求める情熱」と「権力への不信」にかけては比類のない人物を失ってしまった、と語った。ピーターズ氏もまた弔辞のなかで権力への不信をくりかえし語り、そのなかでアーロンの死には連邦検察官にも責任があると強く非難した。

「悲しいことだがアーロンは彼らに事件をでっちあげる機会を与えてしまった」と彼は語った。「“してやったり！”と自慢できることを」

「彼らにはアーロンが実際どんな人物なのか、あるいは彼が何をやっていたのかなど、どうでもよかった」とピーターズ氏は語った。と同時に、アーロンに会ったとき「若くて小柄で、ああ何て素晴らしい人物！」と思ったと述べ、政府に立ち向かった彼の理念を、独立革命期の愛国者の主張に喩（たと）えた。

葬儀の終わりの挨拶で「アーロンは今でもずっと生きている、善を求める声として」と父親は語った。「息子は私心を捨て、世界をすべてのひとにより良き場所にしようとして、短い人生を捧げました」

「無私無欲の…」というのが葬儀の間ずっと多くの人の口から何度となく出てきた形容詞だった。参列者によれば、他者のことを一貫して第一に考えることがアーロンの飛び抜けた特質だったという。

シェークスピアのマクベスを引用して、ピーターズ氏は「ここに参列された皆さんの悲痛さはアーロンが成し遂げた仕事の大きさと等しいはずはありません。もしそうなら皆さんの悲しみは永遠に終わることがないことになってしまいますから」とも語った。

葬儀の締めくくりで父親のスウォーツ氏は、「絶望が深ければ深いほど（そして実際みな絶望しているのですが）私たちはみな世界の変革に参画しているのだということを心にとめておかねばなりません。バーナード・ショウが言っていたように“希望をいだいたことのない人は絶望することもない”のですから。だから私たちは決して歩みを止めません」と語った。

アーロン・スウォーツの追悼式は全米各地で開かれる予定で、今その計画が進行

中である。今週末にはニューヨーク市で計画されていて、タイムズスクウェアでおこなわれる追悼式には、数百人をこえる人びとが集まるものとみなされている。